



〈R05172019〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い ○ 悪い
マークを消す時	○ 良い ○ 悪い ○ 悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

例) 3 8 2 5 番
↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章 A・B を読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、表現を改めた箇所がある。

A

数年前、ビジネスパーソン向け自己啓発書——いわゆるビジネス書——に現れる進化論について検討したことがある。そこでは、ビジネス書の思想的背景をなしている社会進化論は、ダーウィンの進化論というより、資本主義の護教論としてのスペンサー流の発展的進化論であると論じた。

その後、自己啓発の源流といわれるニューソートについて調べる機会があった。ニューソートとは、禁欲を説いたカルヴァン主義への反発として一九世紀アメリカにおいて生じた宗教運動である。最大公約数的な教義をとりだすなら、「人間が心の中で強く思ったことは必ず現実化する」(ポジティブ・シンキング)というものになるだろうか。

その際に強い印象を受けたのが「進化」という語の多用である。たとえば、ニューソート研究の基本書であるラーソン『ニューソート——その系譜と現代的意義』を開くと、初期の主導者のひとりヘンリー・ドラモンドの引用文では、わずか八行の文章に「進化」が五回も登場する。自身の教説には「進化論」という「科学」によるお墨付きが与えられているのだ、という自負がそこには感じられる。

そもそもニューソートの思想は、宇宙はいかなる形をもとりうるエーテル状の物質であり、人間が思考によって命令を下げばそのとおりの形になるという、高度にスピリチュアルなものである。それがなぜ、本来は唯物論的な自然科学である進化論をこうもあつさりと呼用できたのか、そしてその進化論を通して科学の¹後ろ盾を得る(と称する)ことができたのか。謎といえば謎である。

とはいえ、その謎を探るためにアマゾンの奥地にまでもおむく必要はない。われわれにとって進化論は自然科学ではなく(「自然な科学」として(も)活用可能である、という点に着目することで、ニューソート(自己啓発)と進化論の親密な結びつきをよりよく理解できるようになるのではないか。これが私の考えである。

宗教に関する認知的研究を行う哲学者のロバート・マッコレーは、次のような興味深い主張を行っている。すなわち、認知という観点からいえば、人間にとって自然であるのは宗教であり、おおむね不自然であるのは科学である、と。ここで「自然」とは、それが人間にとって「なじみ深く、自明で、直感的で、あるいは反省なしにそれを抱いたりそれを実行したりする」という意味であり、「特定の文化的インプットからの²相対的な独立性」に基づいているという意味である。要するに、人間のもつ普遍的な性質は人間本性³ヒューマン・ユニヴァーサルズに適っている、ということだ。人間の認知システム(認知バイアス)に沿っているもの、といってもいい。

上記の観点からすれば、科学は人間にとって「**a**」な営みであるといえる。自然科学の名のとおりに科学とは自然を研究する営みであるが、その遂行には人間の「**b**」な認知バイアスの欠陥を補うための「**c**」な思考、制度、慣習が多数必要である。専門研究者になるためには長年にわたるトレーニングをしなければならぬ。科学が不自然なものであるとはこのような意味である。

ニューソートと進化論のかかわりで私が注目するのは、目的論的思考に対する態度である。世界を目的論的に理解することは、われわれ人間にとって「自然」な、根深い認知傾向である。実際、一七世紀に科学革命が起こるまで、学問の世界においてもアリストテレス流の目的論的な世界観こそが「自然」なものであった。

その目的論を、自然科学で扱うことのできる対象に変えた——目的論を自然化した——のが、進化論(ダーウィニズム)である。進化論と目的論の関係は独特である。近代物理学は目的論をその理論から放逐したといえるかもしれないが、進化論はそうではない。進化論は、目的論を排除するのではなく、むしろそれを自然主義的な枠組みの中で扱えることを示した。これによって生物の合目的な性質を自然主義的な研究プログラムのもとで理解できるようになったのである。

ニューソートはそうした進化論の特質(目的論の自然化)を逆転させた(自然の目的論化)。アリストテレスの世界観が自然を目的論化し、進化論が目的論を自然化したとすれば、ニューソートは当の進化論を用いて再び³自然を目的論化したといえる。これによってニューソートは、人間の認知システムにとって「自然」そのものである目的論的な教義を維持しながら、本来その教義にとっては「不自然」で扱いにくい科学の一員であるところの進化論を存分に活用するどころか、あまつさえそれをもって自らを科学的と自称することまでできたのである。

以上のように、強烈な目的論的世界観をもつニューソートにとって、目的論の扱いに長けた科学である進化論は、廃改造を施して活用するのにきわめて都合のよいアイテムであった。進化論のこうした活用法は、その後の新宗教や自己啓発、ビジネス書にいたるまで連続と引き継がれている。そこにおいて進化論は、dとして、いまなお重要な位置を占めているようである。

(吉川浩満の文章による)

B

ヒトはモノを作り出し、消費し、破壊・放棄する。モノはヒトの従属物であり、それ以上の何者でもない。こうした見方を否定し、ヒト社会におけるヒトが作り出したモノの役割を重視する、物質性 (materiality) を巡る議論が二〇年ほど盛んになってきているようだ。筆者はこの議論がどういった分野にどこまで浸透しているのか、またその議論がどのような哲学的含意を持ちうるのかについてはあまり把握していないし、たいした関心もないのだが、少なくとも考古学と進化論の接点を考察しようとする場合、こうした視点が重要になってくることだけは間違いないと考えている。

実際、考古学でも、物質性を巡る議論が重要視されている。考古遺物は名前の通り、人間活動の遺物であり、その遺物を詳細に観察・記述・分析することにより、生み出した人間活動を復元することが考古学の大前提であった。しかし、先述したように、ヒトが生み出したモノはヒトに従属するだけではない。むしろ、ヒトの活動にさまざまな影響を与えるものである。

たとえば、一部の人間集団において、日常土器に一定の文様が施されるようになったとしよう。この習慣が始められた当初は、特に大きな意味もなく、何となく親世代から子世代に受け継がれていくだけかもしれない。しかし、ヒトというのは不思議なもので、こうしたただの伝統的習慣に何かしらの重要性を見出そうとするものである。すなわち、どこかの時点で「われわれは土器にはこのような文様を施す集団であり、この集団に属す限りは土器に対してこの文様を施すべきである」という規範が作り出される。そしてこの規範が、さらには集団としてのアイデンティティに結びつき、集団の結束度 (北さまざまな文化の類似性) を高めることにつながっていくこともある。

ここで、単なるヒトの従属的对象を超え、モノは主体的役割を果たすようになる。土器の文様がヒトの活動を方向づけ、束縛するようになるのである。もちろん、これはヒトの心理的活動の産物に過ぎないかもしれない。しかし、人間活動の「遺物」「産物」として見なされてきたモノが、何らかの形で人間活動との間にある種のフィードバックループを作り出すという点は極めて重要であろう。実際、たとえばある地域で出土する考古遺物の類似性が、加速度的に高まっていく様子が見てとれたとしよう。もちろん何らかの外的要因がこうしたパターンを生み出す場合もあるが (その類似性を生み出す素材が容易に手に入ったようになった、など)、e、というフィードバックループが原因である場合も考えられるだろう。

もう少し具体的な例で確認しておこう。たとえば Hodder (2012) は、こうした物質性の議論を援用し、考古学においてもヒトとモノのネットワーク的理解 (これを彼は entanglement と呼んでいる) を重視すべきだと論じる。モノはヒトにも他のモノにも依存し、またヒトもモノや他のヒトに依存している。たとえば、Hodder がフィールドにしている Catalhöyük という遺跡においては、何度も作り直されて長く使用される家とそうでない家があるという。こうした違いは、家の機能の差ではなく (実際、両者の間で大きさや有用性には違いがないようだ)、家に持たされた歴史的意味によると Hodder は考えている。そこに住む人たちがその家の歴史的意味を重視するがゆえに、家はわざわざ作り直され、長く使用される。家の作り直しにはさまざまなモノが必要であり (壁に塗る漆喰や、漆喰の原料を掘り出す道具など)、その意味において家を作るモノは他のモノに依存している。家の作り直しはもちろんヒトに依存するが、ヒトが家を作り直すのは、家が持つ歴史的意味のゆえである。そしてこの歴史的意味もまた、個人ではなくヒト同士の関係の中で生み出される。このように、ヒトとモノが互いに依存し合い、複雑なネットワークを構成しているため、考古遺物もそのように理解すべきだというのが Hodder の主張である。こうした主張の中で、ヒトとモノの関係をヒト→モノという一方に限定しない、物質性に関わる議論が、一つの柱となっているわけである。

上記の主張を、Hodder が従来から展開してきたポストプロセス考古学の自然な拡張とみなすべきか、はたまた単なる焼き直しと見るべきかは議論の余地があるだろう (私はどちらかという後者である)。ただし少なくとも、考古学、それがかねてより進化論的視点に批判的な、ポストプロセス考古学の旗手でもある Hodder の議論の中で、物質性を巡

る議論が肯定的に評価されているのは重要である。なぜなら、後述するように、物質性を巡る議論とニッチ構築理論(niche construction theory) はかなり親和的な内容を持つているからだ。

進化論の中でも、上記のような物質性を巡る議論と親和的な主張がある。それがニッチ構築理論である。こちらも「二〇〇年で注目を集めるようになった理論の一つであり、拡張された総合説(extended evolutionary synthesis)を主張するグループの鍵となる理論の一つでもある。ここではこのニッチ構築理論をごく簡単に概観しよう。

ではまず、ニッチ構築理論とはどのようなものだろうか。この理論の提唱者たちによる定義を確認しておこう。

ニッチ構築は、現在の時間的・空間的場所ので環境因子を物理的に攪乱するか、現在とは異なる時間的・空間的場所に移動して異なる環境因子にさらされることによって、環境中の一つもしくは複数の要因を能動的に変化させ、自らの特徴と環境要因との関係に変更を加える事で生じる(Odling-Snee et al. 2003)。

大雑把な言い方をすれば、f (すなわち、ニッチを構築する) ことによって選択圧そのものを変えてしまう、というものである。たとえばスズメバチの幼虫は当然ながら巣の中でしか成長できない。これはワーカーが持ってきた餌に頼らざるをえないというだけでなく、温度や湿度の管理もしっかりとなされた巣でしか生き延びることはできないようである。もちろんながら、この巣はスズメバチ自身が作り出した環境であり、その環境に対して、スズメバチの幼虫は適応して進化しているわけである。

こうしたニッチ構築が、上述した物質性の議論と類似しているのは、(物質の主体性如何はさておき) 生物が作り出したモノ的環境が、生物の進化そのものに大きな影響を与えているという点である。確かに、こうした生物とモノの間の進化的フィードバックループは、ヒトの活動とモノとの間のフィードバックループと類比的に捉えることが可能だろうし、拡張された表現型という従来の見方にもあった、環境への働きかけをあくまでも進化の「産物」としか見なさない姿勢を、進化の「プロセス」の中に組み込んだという点でも物質性を巡る議論と似たところがある。

ニッチ構築理論については、提唱された当初、懐疑的な目で見られるか、そこまで大きな注目も浴びてこなかったような印象もあるが、現在の進化生物学では、少なくともある程度の支持を集めているように見える。先述した「拡張された総合説」についてもまだまだ議論の余地があるとはいえ、八〇〇件以上の引用が示すように、それなりに注目を集めていることは確かである。

さらに、こうしたニッチ構築は、当然考古学とも密接な関係にある。現在世界中の多くの人々が、遊動性の狩猟採集生活を捨て、何らかの形で農耕などの栽培作物に頼って生活している。農耕などによって改変された環境それ自体が、ヒトが作り出したニッチであり、ヒトはそのニッチに依存して生活しているわけである。もしこうした依存関係を破棄し、いきなり狩猟採集生活に戻れと言われても、大半のヒトは戻ることできないだろうし、そもそも現在の人口を長く支えられるだけの動植物は地球上に存在しないだろう。このように、ヒトは自分たちの生活環境に働きかけ、それを變更して新たなニッチを作り出し、そこに依存して新しい文化を構築してきたわけである。

先述したHodderでも、ニッチ構築理論はかなり好意的に扱われている。Hodderが重視するのはやはりモノの持つ主体性であり、ニッチ構築理論では、これまでの進化的アプローチにはなかったモノと生物の間のフィードバックループを重視する点が、彼の考えるEntanglement theoryに近いものだと思われている(もちろん、Hodder自身はモノにさらに強い主体性を認めようとするわけだが)。

他にも、学習環境の構築というニッチの構築が、物質文化や規範などの継承に重要な役割を果たしてきた可能性が指摘されている。製作に複雑な技術が必要な石器などの人工物を、一から各自が考案・工夫するのは非常に困難だが、製作の模範となるような教師がいれば、その技術の継承も格段に容易になるだろう。実際、伝統的社会では直接的な指導を行わずとも、環境を整えてやることで、学習を促進するようなケースが多くみられる。たとえば教師になる熟練した製作者が、未熟な若者を周りに集めて、その前で石器を製作するだけでも、若者にとっては非常によい学習機会になるだろう。こうした学習を通じ、複雑な文化やさまざまな規範が世代を超えて継承されてきたのかもしれない。

このように、ニッチ構築理論はさまざまな形で考古学にとっても有用な理論である。また、O'Brienのようにもとより進化論に近い考古学者だけでなく、進化論には否定的なポストプロセス考古学をリードしてきたHodderさえ、ニッチ構築理論には一定の歩み寄りを見せている点も重要だろう。こうした点を踏まえれば、現状ではかなりの程度、ニッチ構築理論が考古学でも抵抗なく受け容れられる可能性を示していると考えられる。

ここまで、物質性を巡る議論とニッチ構築理論の親和性を概観してきた。上記の議論が示すように、考古学と進化論

については、これまで以上に広い合意を可能にするような接点が見出されつつある。

ただ、こうした接点が見出され始めて一〇年を経るが、現状では多くの研究者はまだまだ進化論と一定の距離を置くように見えるのも確かである。たとえば Johnson (2020) というある種の教科書的な書籍で、進化論は二章に亘って議論されているものの、ここではまだ進化論的なアプローチが考古学・人類学の中で非常に‘controversial’なものとして位置づけられている。ただ、具体的にあげられる批判は Shanks and Tilley (1987) によるものだけである。Shanks と Tilley はポストプロセス考古学の旗手の中でもある種の過激派であり、かねてより進化的アプローチに非常に懐疑的な研究者である点には注意が必要だろう。また同じく教科書的な書籍である Renfrew and Bahn (2020) においても、進化論的視点はプロセス考古学の流れの中で位置付けられ、幾ばくかのスペースが割かれている。とはいえ、それほど肯定的な扱いにも見えない。このように、考古学の中における進化論の位置づけは、まだ微妙なものであるようだ。

(中尾央の文章による)

(注) Hodder (2012) ……「著者名(発表年)」は、論文や書籍を引用する際の表記法の一つである。以降も同様である。

ポストプロセス考古学……Hodder が始めた考古学の一派。
controversial……議論の余地がある、異論が多い。

問一 文章Aの傍線部1「後ろ盾」とあるが、これと同様の意味で著者が用いている語句を文章Aの本文中から三字以上五字以内で抜き出し、記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問二 文章Aの傍線部2「相対的な独立性」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ たとえば、X、Y、Zという存在が、それぞれ互いに干渉しあってはならないということ。
- ロ たとえば、X、Y、Zという存在が、それぞれ別次元にあり続けるほうがよいということ。
- ハ たとえば、X、Y、Zという存在が、それぞれ一定以上の距離を保っているということ。
- ニ たとえば、X、Y、Zという存在が、それぞれ独自の進化を続けても構わないということ。
- ホ たとえば、X、Y、Zという存在が、それぞれの文化にも属することができないということ。

問三 文章Aの空欄 a・b・c には対比的な語句が入る。それぞれに入る語句として適切なものを文章Aの本文中から三字以内で抜き出し、記述解答用紙の解答欄に記せ。同じ語句を二度用いてもよい。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問四 文章Aの傍線部3「自然を目的論化した」とあるが、その意義として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ニュースートは、直感的に理解しやすい目的論的な教義を中心におきつつ、科学的であるように装えたこと。
- ロ ニュースートは、なじみにくい自然科学を目的論的な主張で巧みに上書きし、科学の一員になりえたこと。
- ハ ニュースートは、アリストテレス流の自然観をその基盤に据え、目的論的な科学の再興を目指せたこと。
- ニ ニュースートは、目的論的な自然科学を唯物論的に理解し、あたかも科学的な教義であると自称できたこと。
- ホ ニュースートは、進化論の自然科学的側面を批判し、目的論こそが科学の本質であると説明できたこと。

問五 文章Aの空欄 **d** には著者が文章Aの題目でも使用している表現が入る。空欄 **d** に入る表現として適切なものを文章Aの本文中から十一字以上十五字以内で抜き出し、記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問六 文章Aの内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 進化論は目的論的な思考方法を内包しつつも自然科学のなかで確固たる地位を占めるまで発展したが、それがゆえに、ニューソートは機械論的な思考方法を援用することができた。
- ロ 自己啓発の源流にあたるニューソートが「進化」という用語を何度も使っていたことに著者は強い衝撃を受けたものの、その運動の広まりを肯定し、一定の理解を示している。
- ハ 最近出版されている多くのビジネス書の背景には、ダーウインをベースとする唯物論的な社会進化論があり、専門家以外にもわかりやすく、理解が促される工夫がなされている。
- ニ ニューソートやその思想の延長上にあるビジネスパーソン向けの自己啓発書の多くは目的論的な思考を必要としているので、都合よく改変を施した進化論は非常に便利であった。
- ホ 進化論は何らかの目的に適切しているように振る舞っている生物の性質を、目的論を完全に捨てることなく、唯物論的な近代科学の枠組みの範囲で理解することに成功した。
- ヘ あらゆる事物は何らかの目的を実現するためであると推論する科学である目的論と、唯物論的な科学である進化論は相互依存的な関係にあり、ニューソートはそれを利用した。

問七

文章Bの傍線部4「ヒトの従属の対象を超え、モノは主体的役割を果たすようになる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ モノはヒトが期待する機能を持っているほかに、ヒトの生活を変え、親世代から子世代へと受け継がれやすくなる機能を持つということ。
- ロ モノはヒトにただ使用されるだけの存在にとどまらず、モノ自体がヒトの生活や文化のあり方を変えていくようになるということ。
- ハ モノはヒトの心理的活動の産物としてだけでなく、たとえば土器の文様がヒトの活動の記録として後世に伝わるようになるということ。
- ニ モノはヒトの産物である以上に、集団の伝統的習慣や規範を構築するので、過去の人間活動を復元するのに役立つということ。
- ホ モノはヒトによって作り出され、消費、破壊・放棄されるのみならず、現在の人間活動を理解するための考古遺物であるということ。

問八

文章Bの空欄 **e** に入る表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 集団の文化の結束性が強化される↓集団に固有な文様を施す規範を守ろうとする↓集団のアイデンティティに強く結びつく
- ロ 集団によりモノの物質性が強化される↓その物質性が集団のアイデンティティを強固にする↓集団が多様なモノを作り出す
- ハ 類似したパターンが集団のアイデンティティを形成する↓その類似したモノがヒトを豊かにする↓ヒトの文化の多様性が高くなる
- ニ 集団が類似したモノを生み出す↓その類似したパターンが集団のアイデンティティを強化する↓モノの類似度がさらに高まる
- ホ モノの類似度が低下する↓集団がモノの類似度を高めようとする↓その類似したパターンが集団のアイデンティティを確立する

問九 文章Bの傍線部5「ヒトとモノの関係をヒト↓モノという一方向に限定しない、物質性に関わる議論」とあるが、それはどういう議論か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ヒトとモノは相互に依存し合う関係にあるので、それぞれの物理的側面に着目をして考古遺物の有用性を検討し直すべきという議論。

ロ ヒトはモノを作る一方でモノの機能ではなく歴史の意味を重視するという特徴から、モノへのこだわりを大切にすべきという議論。

ハ ヒトとモノとの複雑なネットワークの理解のためには、モノの物質性をヒトの心理的な側面を中心にして解釈すべきという議論。

ニ ヒトとモノとの複雑なネットワークの捉え方を、ポストプロセス考古学の延長とみるか古い議論の焼き直しとみるべきかという議論。

ホ ヒトがモノを作り出すことだけでなく、産み出したモノがヒトの活動に影響を与えるフィードバックループも重視すべきという議論。

問十 文章Bの空欄 f に入る表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 環境が生物体に働きかけ、生物体を作り替える

ロ 生物体が環境に働きかけ、環境を作り替える

ハ モノがヒトに働きかけ、ヒトを作り替える

ニ 生物体が環境に働きかけ、生物体を作り替える

ホ 環境が生物体に働きかけ、環境を作り替える

ヘ ヒトがモノに働きかけ、モノを作り替える

問十一 文章Bの傍線部6「物質性を巡る議論と似たところがある」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 生物が改変した環境を進化のもたらした帰結ではなく、進化の過程として捉えることで、主体である生物の進化に環境が影響を与えるという構図を理解可能になったことが、物質性を巡る議論の構造と似ているから。

ロ 学習環境の構築というニッチ構築を進化の結果ではなく、進化の途上での事象として捉えることで、物質文化や規範の継承から主体性を重視する議論に変えられたことが、物質性を巡る議論の構造と似ているから。

ハ ヒトの活動をスズメバチにみられる単純な進化ではなく、生物進化の過程の一コマであると捉えることで、最近の考古学と進化生物学の緊密な関係が明白になってきたことが、物質性を巡る議論の構造と似ているから。

ニ 人間が土器に文様を施すことを進化のアウトプットではなく、文化進化に必要な事項として捉えることで、人間集団のネットワーク化の過程を解明できるようになったことが、物質性を巡る議論の構造と似ているから。

ホ 人間による耕地の開拓を進化の文脈ではなく、進化の途中での出来事として捉えることで、多くの人口を扶養可能な食文化の形成を理論的に説明できるようになったことが、物質性を巡る議論の構造と似ているから。

問十二 文章Bのテーマを体言止めで表現するとどうなるか。文章Bの本文中の表現を用いて三十字以上三十五字以内で記述解答用紙の解答欄に記せ。ただし、「物質性」「ニッチ」「考古学」「進化」の四語を必ず使うこと。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問十三

以下の選択肢は、六名の大学生が文章A・Bを読解し、それをもとに考察した報告文の一部である。文章A・Bの内容を的確に捉えた学生の報告文として適切なものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ニューソートは進化論の目的論的な思考法を取り込むことで自説を強化することができた。一方、考古学もまだ否定的な知見がいくつかあるものの、合意の得やすい進化論の目的論的な捉え方によって文化を分析し、これまでの学問の枠組みを越えることが期待されている。

ロ ニューソートは進化論の自然科学的な考え方との融合に成功した。一方、考古学は、積極的に進化論を取り入れようとする学派とそれに批判的な学派の間での論争に決着が付き、進化論との融合は困難になってしまったので、ニューソートのしたたかさを学ぶべきであった。

ハ ニューソートは進化論の一部を都合よく取り入れて自らの権威づけに利用してきた。一方、考古学は自領域ですでに確立してきた方法の議論と進化論の議論を共有するという丁寧な方法で理論的な整合性をとろうとしており、今後の両学問の結合の展開を注視していきたい。

ニ ニューソートは進化論を使いこなす術をよく理解しており、学問の融合を成功させた事例として評価できる。一方、考古学は進化論を自らの理論の中に取り入れるために多くの労力を割く人もいれば、批判的な研究者も多く、学問的な対立に明け暮れていて、評価できない。

ホ ニューソートは進化論との融合を目指して学問的な成果をあげてきた。一方、考古学も進化論の有益な部分を取り込むべく、元々考古学にあった議論を基盤として積極的に両者の融合を図ってきており、批判意見は多いものの、その試みは近いうちに成功すると考えられる。

ヘ ニューソートは進化論をうまく取り込んだように見えるが、それは宗教に端を発した運動が飾りとして利用しただけである。一方、考古学も進化論を取り込もうと試みているものの、まだ二つの領域が重なり合う点を得られたところであり、両学問の融合の道のりは長い。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

俊恵、物語りのついでに問ひていはく、遍昭僧正の歌に、「たらちねはかかれとてしもむばたまのわが黒髪をなでずやありけむ」。この歌の中に、いづれの言葉かことに勝れたる、覚えむままにのたまへといふ。予いはく、「かかれとてしも」といひて、「むばたまの」と休めたるほどこそは、ことにめでたく侍れといふ。かくなり、かくなり。はやく歌は境に入られにけり。歌よみはかやうのことにあるぞ。それにとりて、「a」といはむとて「ひさかた」と置き、「b」といはむとて「あしびき」といふは常のことなり。されど、初めの五文字にてはさせる興なし。腰の句によく続けて言葉の休めに置きたるは、いみじう歌の品も出でき、ふるまへるけすらひとなるなり。古き人、これをば半臂の句とぞいひ侍りける。半臂はさせる用なき物なれど、装束の中に飾りとなるものなり。歌の三十一字、いくほどもなきうちに思ふことをいひ極めむには、空しき言葉をば一文字なりとも増すべくもあらねど、この半臂の句はかならず品となりて、姿を飾る物なり。姿に華麗極まりぬれば、またおのづから余情となる。これを心得るを、境に入るといふべし。よくよくこの歌を案じて見給へ。半臂の句も詮は次のことぞ。眼はただ「c」といふ四文字なり。かきはずは、半臂詮なからましとこそ見えたととなむ侍りし。

(鴨長明『無名抄』による)

(注) 俊恵……平安時代末期の歌人。鴨長明の歌の師。

遍昭僧正の歌……『後撰和歌集』によると出家した折りに詠んだ歌。

予……鴨長明。

半臂……束帯着用の際、袍と下襲の間に着る短い衣。

問十四 傍線部1「たらちねはかかれとてしもむばたまのわが黒髪をなでずやありけむ」の内容を説明したものと最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 母は、幼い我が子が僧になることを願って髪を撫でてはいなかっただろうに。
- ロ 母は、立派に育ってほしいと願い子の黒髪を撫でなかつたはずはないだろうに。
- ハ 母は、幼かった私が仏門に入れることを願いながら黒髪を撫でていただろうに。
- ニ 両親は、剃り落とされた子の黒髪を悲しそうに見つめなかつたはずはないだろうに。
- ホ 両親は、歌人にするために育てたわけではないと後悔しないことはないだろうに。

問十五 傍線部2「れ」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 俊恵から長明への敬意を表す助動詞
- ロ 俊恵から遍昭への敬意を表す助動詞
- ハ 長明から俊恵への敬意を表す助動詞
- ニ 長明から遍昭への敬意を表す助動詞
- ホ 長明から読者への敬意を表す助動詞

問十六 空欄 a・b に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ a 光 b 池
- ロ a 月 b 山
- ハ a 影 b 谷
- ニ a 虹 b 田
- ホ a 水 b 峰

問十七 傍線部3「けすらひ」と同様の意味をもつ文中の語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 境 □ 興 ハ 飾り ニ 華麗 ホ 余情

問十八 空欄 c に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ たらちね □ とてしも ハ むばたま ニ わが黒髪 ホ ありけむ

問十九 傍線部4「半臂詮なからまし」の現代語訳として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 半臂の句の反対の意味の歌になるだろう
□ 半臂の句の意味が伝わらなくなるだろう
ハ 半臂の句の意が変わるだろう
ニ 半臂の句も効果がないだろう
ホ 半臂には例えられないだろう

問二十 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 俊恵は自分の和歌を遍昭のそれだと言って弟子の鴨長明の力を試そうとした。
□ 俊恵は実力を試そうと鴨長明が覚えている和歌の重要な言葉を聞こうとした。
ハ 第三句に枕詞をうまく置いて言葉の休めにする和歌に品位が備わってくる。
ニ 「半臂の句」とは万葉集時代の歌人が命名した和歌の重要な表現技法である。
ホ 思いを表現し尽くした歌を詠むためには一文字も無駄にできないものである。
ハ 鴨長明は俊恵に対して「半臂の句」になぜ品位が備わっているかを説明した。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名・読点を省いた箇所がある。

徐州司戸柳雄、於隋資妄加階級。人有告之者。陛下令其自首。不_レ首_レ。遂固言_ニ是_レ實_ニ。竟不肯_レ首_ニ。大理推得其偽。將_レ処_ニ雄_一死罪。少卿戴胄奏_{スルニ}。法止_ハ合_レ徒_ニ。陛下曰_{ハク}。我已_ニ与_ニ其_レ断_ヲ。当_レ讞_ニ。但_レ当_レ与_ニ死罪_ヲ。胄曰_{ハク}。陛下既不_レ然_ニ。即付_ニ臣_一法司。罪不_レ合_レ。a、不_レ可_ニ酷_ニ濫_{ナル}。陛下₂作色遣殺_ニ。胄執_レ之_ヲ。不_レ已_ニ。至於四五_ニ。然後_レ救_ニ之_ヲ。乃謂_ニ法司_一曰_{ハク}。但能_レ為_レ我_ニ如_レ此_一守_レ法_ヲ。豈_ニ畏_ニ濫_ニ有_ニ誅_ニ夷_ニ。此則_レ悦_ニ以_レ從_レ諫_ニ也。

(吳兢『貞觀政要』による)

(注) 徐州……地名。今の山東省南東部と江蘇省北西部の地域。

司戸……地方行政区の役職。戸籍・田宅などを司る。柳雄……人名。陛下……唐の太宗に対する敬称。

大理……司法官。少卿……次官職。戴胄……人名。徒……むち打ち刑。

誅夷……討ちたいらげる。

問二十一 傍線部1「推得其偽將処雄死罪」の読み下し文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ すいしてそのいつはりなるをえ、まさにゆうをしぎいにしよせんとす
- ロ そのいつはりなるをおしえて、まさにゆうをしよしてしぎいとせんとす
- ハ すいするにまさにそのいつはりをしよせんとし、ゆうのしぎいをえん
- ニ そのいつはりのしやうをおしえんとして、ゆうをしぎいにしよさん
- ホ おしうるにそのいつはりは、しやうとしてゆうのしぎいをしよさん

問二十二 空欄 a に入る文字として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 生
- ロ 命
- ハ 罰
- ニ 死
- ホ 去

問二十三 傍線部2「作色遣殺」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 顔色を変えて殺傷部隊の派遣を命じた
- ロ 美しい顔色を見せて笑殺しようとした
- ハ 怒りをあらわにして殺せようとした
- ニ 情欲によって大理を悩殺しようとした
- ホ 色彩豊かな甲冑部隊をさし向けさせた

問二十四 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 徐州の司戸柳雄は、隋代に授けられた官吏としての階級を偽って申告していたが、自らそれを認めなかった。
 - ロ 唐の太宗は、隋から政権を引き継ぐ際に、前の王朝で認められた位階官職を剝奪するため、自首を勧奨した。
 - ハ 大理少卿の戴胄は、法に従って太宗を諫めたが、太宗の合理的ではない法解釈によって、法司に左遷された。
 - ニ むち打ち刑が死罪に当たるかどうか、戴胄と太宗が激しい議論を行ったが、死罪相当ではないと判断された。
 - ホ 唐の太宗は、いったん定めた死罪の決定に固執し、敵の攻撃の可能性を説きながら、喜んで死罪を執行した。
- へ 唐の太宗は、戴胄の諫言は、法を遵守する精神にかない、むやみな極刑を避けられるとして、喜んで従った。

<R05172019>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					



12 (大学使用欄)

5 (大学使用欄)

3 (大学使用欄)

1 (大学使用欄)

<R05172019>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

問十二

35

30

問五

11

15

問三

c

3

問二

a

3

問一

b

3

問一

5

3

国語 記述解答用紙